

今日の聖書によれば、キリスト者とは、イエスの乗っている舟に乗り、共に向こう岸に漕ぎ出す人々、とすることができます。ルターは信仰を航海にたとえ、「すべては信仰による。信仰を持たない人は、海を渡らなければならないのに、怖くて船を信頼できない人のようなものだ。その人は、自分がいるところにとどまり続ける。そして、決して救われない。船に乗って渡ろうとしないからである」と言っています。

弟子たちは湖に漕ぎ出します。弟子たちには漁師であった人もいましたが、嵐が襲います。38節の「私たちがおぼれてもかまわないのですか」にはイエスを非難する思いが表れています。イエスが眠っていたので、弟子たちは自分たちが苦しんでいるのにイエスは何もしてくれないと感じたのです。イエスの一言で嵐は止みます。旧約聖書には荒海や暴風が神さまによって鎮められるという表象がしばしば記されています。ここではイエスの姿がそのような神さまの姿と重なって表されています。イエスがこの世に来たことによって、神さまの支配は確かに始まっている、と著者は伝えているのです。「なぜ怖がるのか。まだ私を信頼していないのか」(40節)という言葉によって、イエスは弟子たちに、また私たちに「神の国を実現しようとしている私があなたと共にいる。そのことを信頼して、怖がらずに勇気をもって旅路を続けなさい」と語りかけています。信仰をもって生きるとは、イエスの語りかけに応答し、イエスを信頼して、身を委ねて共に歩むことです。自分自身の中にどんな嵐にも動揺しない確固たる何かを持つことではありません。

嵐を静めたイエスの権威を目のあたりにし、弟子たちは非常に恐れ、「いったいこの方はどなたなのだろう」と互いに言ったと記されています。この後の弟子たちの歩みはこの問いをいつも抱き続ける歩みでした。イエスが捕らえられ、十字架につけられる時に弟子たちは逃げ去ってしまいました。しかし、弟子たちはイエスの十字架の死と復活を知らされることによって、「いったいこの方はどなたなのだろう」という問いの答を理解しました。

初代教会の中で、この出来事はどんな時に思い出されたのでしょうか。教会の活動がうまく進まない時は、嵐の中の舟のように、しかも、イエスがまるで眠っているかのように、何の助けも感じられない時だったのではないのでしょうか。その中でこの出来事を思い起こし、イエスへの信頼を取り戻し、困難を乗り越えることができた、そういう体験が何度も何度もあったと思われれます。私たちが困難の中にいる時、「向こう岸に渡ろう」、「なぜ怖がるのか。まだ信頼していないのか」というイエスの言葉は、私たち自身に向かって語られる、復活させられ私たちと共にいる、イエスの力強い励ましの言葉として聞くことができるのではないかと思うのです。